



目次

コメニウス教育学における『書物』の意義・・・p1
広岡浅子と東洋英和・・・p2
展示ケース「東洋英和の女性作家たち」・・・p4

コメニウス教育学における「書物」の意義

吉岡 良昌

西欧における17世紀の普遍言語構想という時代的文脈の中でのコメニウスの位置づけという問題意識に貫かれた学位論文が最近出版された。^(注1) 西欧における17世紀は、ヨーロッパ共通語であったラテン語の地位の失墜に伴う連動する知(学問・政治・宗教に関わる)の分散と混迷という新たな普遍言語の模索の時代であった。それは、端的に言えば、世界の事象を、神を頂点とする目的論的自然観から説明する方法から、実験に基づく経験主義的な科学的世界観への移行に伴う混迷と模索であった。そのような時代的課題に対してコメニウスが展開した、事物と言葉と書物に関わる哲学的見解と、そこから導き出される教育思想の展開を厳密な文献研究の学問的方法で明らかにした書物である。

たとえば、教育学概論で紹介したコメニウスの『世界図絵』⁽²⁾についても、彼の真の意図は、感覚的な事物主義という通説ではなく、「事物」という存在そのものには、その事物の内奥としての本質(真理、善)としてのアイデア(原型)があり、それが、人間の「精神」において、事物の像として把握されて、「観念」が成立し、それが、人間の「言葉」となって表現されるという点にあった。また、コメニウスの教育思想の根底には、認識論的基盤と同時に存在論的基盤があるのであり、この存在論的基盤に対して、著者は、中世の残存であるという通説に対して、近代を潜り抜け、脱近代へと橋渡しをする可能性を示唆しているという。それは、文字を読み、書くことによって自己を表現し、実際の事物と言葉を結びつけることによって能動的に世界と関わる近代的主体の形成という17世紀の時代的課題に応答するものであった。「世界という書物」「人間という書物」「聖書」という三つの書物を読み解いて、学識と作法と敬虔を習得することが人間の生涯の使命であり、生涯教育の学校の課題であるとするコメニウスは、人間は一生涯、永遠の光を受け取る信仰の光、外的光を受け取る感覚の光、内的光を受け取る理性の光を、人間の心情と意志と知性とに輝き渡らせて、人間形成に励むことを求めている。

コメニウスの教育学は「敬神・奉仕」の精神で教育する学院の基本方針と深く共鳴し、「書物」の人間形成的意義を示唆する学説であると思ひ、紹介させて頂いた。

(よしおか よしまさ 本学人間科学部教授)

注1 『コメニウスの世界観と教育思想—17世紀における事物・言葉・書物』 北詰裕子著
勁草書房 2015

注2 『世界図絵』 J.A.コメニウス著 井ノ口淳三訳 ミネルヴァ書房 1988
(大学図書館所蔵 371.23||C85)



広岡浅子と東洋英和

現在放映中のNHK朝の連続小説「あさが来た」のヒロイン、広岡浅子。
浅子は実は東洋英和女学院とも深い縁がありました。

広岡浅子 ひろおか-あさこ

1849-1919

明治-大正時代の実業家。

嘉永(かえい)2年9月3日生まれ。三井高益の4女。17歳で大坂の富豪加島屋(かじまや)広岡信五郎と結婚。維新後は実業界にはいり、鉾山を経営。加島銀行設立、大同生命の創業にくわわった。日本女子大の創立にもつづいた。晩年に受洗。日本YWCA中央委員。大正8年1月14日死去。71歳。京都出身。



(写真日本女子大学成瀬記念館蔵)

“ひろおか-あさこ【広岡浅子】”, 日本人名大辞典, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2015-11-25)

広岡浅子は事業だけでなく、教育や婦人運動においても熱心に活動しました。

1886年(明治19)に創設された日本基督教婦人矯風会にも参加し、女性の権利、教育、文化向上のために尽力しました。この婦人矯風会が1988年(明治21)に発行したのが『東京婦人矯風雑誌』です。『東京婦人矯風雑誌』は誌名変遷を経て現在の『婦人新報』に至っています。

この雑誌には広岡浅子だけではなく、村岡花子、露木精一(東洋英和女学校創立当初の教師)、市川房枝等も記事を掲載しています。

『東京婦人矯風雑誌』の創刊号から『婦人新報』の1958年までは復刻版として大学図書館が所蔵しています。雑誌『婦人新報』は2003年(1231号)から現在まで継続して購入しています。

余談ですが、『婦人新報』1345号(2014年4月)には「花子とアンと矯風会」と題して100年前の婦人新報と村岡花子の関係について記事が掲載されています。

村岡花子との縁

東洋英和の卒業生である村岡花子は婦人矯風会を通じて広岡浅子と知り合いました。

広岡浅子が御殿場二の岡で行った夏季勉強会には大正5年から参加しました。23歳の時のことです。この勉強会は10日あまりの日程で広岡浅子の別荘で開かれ、日本女子大学卒業者を中心に、矯風会関係者など20名ほどが集まって行われました。同志社大学総長などが講師として名を連ね、聖書、比較宗教学、インド哲学などの講義が行われました。花子はこの勉強会に大きな感銘をうけたと記しています。「二の岡で過ごした二夏は私の後年の生活のある程度決定したともいえる。」(雑誌『父母教室』より随筆夏のおもいで)全日本教育父母会議発行 昭和39年7月号)

浅子の「自分のためにしたいこと(小我)に固執せず、社会のためにすべきこと(真我)を見つけなさい」という言葉に花子は強い感銘を受けて文学者を志しました。

ボーリーズとの縁

ウィリアム＝メル＝ボーリーズ（一柳米来留）

明治-昭和時代の社会事業家,建築家。

1880年10月28日アメリカのカンザス州生まれ。明治38年来日,滋賀県立商業の英語教師となる。41年建築事務所をひらく。44年近江基督(キリスト)教伝道団(のちの近江兄弟社)を創立。近江療養院を開設し,メンソレータムを製造・販売した。昭和16年帰化。神戸女学院などを建築。昭和39年5月7日死去。83歳。コロラド大卒。旧名はウィリアム＝メル＝ボーリーズ(William Merrell Vories)。

“ひとつやなぎ-めれる【一柳米来留】”, 日本人名大辞典, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2015-11-25)

建築家ボーリーズ(ヴォーリスともいいます)は、キリスト教の伝道にも関わり、多くの教会、学校などを設計しました。1933年(昭和8)に建てられた東洋英和女学院の旧中高部校舎も設計しました。その縁から、現在の中高部校舎、法人本部・大学院棟はボーリーズの後継である一粒社ヴォーリス建築事務所によって設計されています。



(写真『鳥居坂わが学び舎』より)

ボーリーズは東洋英和の他にも、神戸女学院、関西学院、活水学院、大同生命旧肥後橋本社ビルなどの建設を手がけています。

このボーリーズと1919年(大正8)に結婚したのが一柳満喜子です。満喜子は広岡浅子の娘婿恵三の妹として、子爵一柳末徳の長女として生まれました。兄恵三が広岡浅子の娘亀子と結婚した縁もあり、若い時から広岡家に身を寄せていました。ボーリーズと結婚する時も、元華族と外国人の結婚は前例がなく、反対が多かったのですが、広岡浅子の後押しが大きかったといわれています。

参考文献

『維新経済のヒロイン広岡浅子の「九転十起」』原口泉著 海竜社 2015 289.1||H71

『広岡浅子 新時代を拓いた夢と情熱』歴史読本編集部編 KADOKAWA 2015 289.1||H71

『人を恐れず天を仰いで』広岡浅子著 新教出版 2015 289.1||H71

『アンのかご』村岡恵理著 新潮社 2011 910.268||Mu55

『鳥居坂わが学び舎 1933-1993』東洋英和女学院中高部建築調査委員会編
東洋英和女学院同窓会 1994 377.28||To83t

『メル・ヴォーリスと一柳満喜子』Grace N Fletcher 著 水曜社, 2010 289.3||V91

展示ケース「東洋英和の女性作家たち」

図書館エントランスの展示ケースでは英和出身の片山廣子、柳原白蓮、村岡花子の 3 人を取り上げ、東洋英和女学院史料室所蔵の貴重なパネルを中心に展示しています。明治から大正にかけての本学院の様子がわかるレトロな写真も見ることができます。期間中は本学図書館所蔵の貴重な資料も展示していますので、どうぞご覧下さい。



1885 年(明治 18)に校舎前で撮影された生徒と教師
(中央が初代校長ミス・カートメル)

1900 年(明治 33)に建築された木造校舎



(写真東洋英和女学院史料室蔵)

編集後記

かえで祭も終わり、はやくもアドヴェントの季節になりました。

図書館にもクリスマスツリーやリースが飾られています。日の暮れるのが早いこの季節に

暖かい図書館の中を眺めるのもまた一興です。

図書館も新しい活動を始めました。e-pass やポスター、ホームページなどのお知らせを発信しますので、できるだけアンテナを張ってチェックしてくださいと嬉しいです。

(編集担当: 鷺谷)

「図書館だよりは図書館ウェブサイトからバックナンバーも見ることができます

<http://libweb.toyoeiwa.ac.jp/lib/kankou.html>」
